

第二十七回 西川鯉りさいたる

義太夫 「廓 禿」

春風に 浮かれ浮かれて花の里 禿かむろとたくさんそうに
いうておくれな 工工憂きのさと 外でなぶられ 内ではせかれ
ほんに身もよも内緒の 文の使いも二度三度いつが春やら花ぢややら
朝の六つから上衣下衣ひき重ね 禿は袖の振りはじめ

つくつくには羽根をつく 一いこう三い四 五重に七重に
琴は十三十四十五 二十三夜の月さまついた

天までついた 工工ついたえ てんてん手まりのいとさま可愛い

京で一番糸屋の娘 二番良いのは人形屋の娘 三で良いのは酒屋の娘 酒屋の娘は器量が
ようて

京で一番大阪で二番嵯峨で三番吉野で四番御所で五番のいとさん見れば
立てば芍薬 座れば牡丹 歩く姿は百合の花

咲いた咲いた咲いた 咲いた桜になぜ駒つなぐ 気もつ風さえよきて吹く

花もかわいか手折りもせまい 可愛い小桜糸桜 禿は空の初桜
散るは吉野の山桜 さて面白い花のさと 心ごころで楽しまん



【解説】

早朝の島原遊廓、まだ太夫さんは床の中なので、禿は羽根つきや鞠つきに興じます。作詞作曲は野澤松輔。1941 年大阪文楽座で初演。

襲名後はじめてのりさいたるの一曲目は、廓の中で開花を待つ蕾の花のような禿にかえて、益々精進していきたいという気持ちを込めて選曲しました一数え年の六歳六月六日の入門を思い出しながら。